

学外研修報告

共通機器部門 共通利用機器管理班 山口信雄

1. はじめに（目的等）

生物学技術研究会は、大学及び研究機関等の生物学の研究分野に携わる技術職員が日常関わっている実験、機器操作及び施設管理などの幅広い技術活動での成果や問題点を発表し、また、討論することにより技術の向上と交流を図ることを目的としている。

今年は初日に第 15 回日本質量分析学会中部談話会が名古屋大学で開催されたため、そちらを聴講してからの参加となった。

2. 期間・場所

期間：令和 2 年 2 月 20～21 日

場所：名古屋大学トランスフォーマティブ生命分子研究所

（名古屋市・日本質量分析学会中部談話会）

岡崎コンファレンスセンター（愛知県岡崎市・生物学技術研究会）

3. 参加者等

日本質量分析学会中部談話会：近郊の質量分析関係者約 70 名

生物学技術研究会：全国の技術系職員 120 名程度（同時開催の生理学会参加者含む）

4. 研修内容

質量分析学会中部談話会では、質量分析の基礎を掘り下げるような講義が中心であった。

生物学技術研究会では、全国の技術系職員より主として生物に関わる技術発表が行われた。

今年度はコロナウィルス予防のため意見交換会が中止になり、どちらの会もマスク着用・手指消毒など厳戒態勢の中で行われた。

5. まとめと感想

質量分析学会中部談話会では、基礎の再確認と掘り下げが中心であった。特に今年度より業務に加わった LCMS に関してはおよそ 95%が既知の内容であり、独学で身に着けた部分の大半が間違っていないことが確認できた。残り 5%は普段意識していなかった部分であり、測定手法の理解向上につながった。

生物学技術研究会では、今年度の発表は断念した。自身の研究テーマを持ち得ない環境下では、毎年クオリティのある発表をすることは難しい。聴講した内容として今年度は分科会の試みが行われ、ゲノム編集技術 CRISPR-Cas9 の基礎概論とグループディスカッションが行われた。これまで動物での利用のみフォローしていたが、植物と動物でサンプルの調製・導入方法が異なっていることと、そのために後に生じる影響についての理解を深められたことは大変有意義だった。